



「子どもたちとの活動を通じて、実は私たちは楽しんでいるんです」と会長の兼本さんは笑って話す。クラブ員同士の横のつながりから、子どもたちとの世代を超えたつながりへとその活動は広がっている。

## 「個」から「共」へ、そして世代を超えたつながりへ

厳しい現状を抱える農業。これからの廿日市市の農業をどうやって守っていくか、生活するために必要な所得を確保できる農業者をどうやって育てるかといったことも、考えなければならぬ時代になっています。

農家の減少や衰退は、そのまま地域の衰退へと直結します。また、農

地を放置していれば限界集落への危機も含んでいます。

農業者の未来が明るいものであるために、農業者と行政のパイプ役を果たし、よりよい農業環境を自らの手で作ることがクラブの使命だと考えています。

それぞれの「個」がプロの農業者。その技術は、親から子へと引き継が

れ、同じ農業者であっても一緒に作業することはなかなかありませんでした。しかし、その技術を「共」有することで、個人では難しかった課題の解決への糸口は見つかると思っています。

事実、クラブ員のつながりから、流通のネットワークが生まれ、現在も広がりつつあります。こうした新しい動きを活性化していきたいと思っています。

はるか昔から人々は、「手間換え」といって、田植えや稲刈りなど、人手が必要なことは地域で共同して作業を行ってきました。実は農業というものは、一人ではできないものなんです。

また、農業者である前に、自分たちも地域の住民です。農業者の視点で、地域を活性化させることが重要だと考えています。

### Interview



佐伯農業者クラブ  
かねもと・りゅうじ  
兼本 龍二 会長  
(37歳・浅原)

佐伯高校を卒業後、農家である家の手伝いなどに従事。29歳で本格的に農業に携わると同時にクラブに加入。現在、山太郎（さんたろう）農園を父と一緒に経営。約3.2畝の土地で、水稻や根菜を主に作っている。

「子どもたちとの活動を通じて、実は私たちは楽しんでいるんです」と会長の兼本さんは笑って話す。クラブ員同士の横のつながりから、子どもたちとの世代を超えたつながりへとその活動は広がっている。

農業を取り巻く状況は厳しい中、クラブ員は地域に根を下ろし、「農業という生き方」を選択し、地域との関わりを通じて、まちを輝かせている。

このまちの農業の未来が明るいものであるためには、「このまちで農業をやりながら生きていきたい」と思えるような「産業としての農業」の確立が必要不可欠だ。その土地で長く育まれてきた強みを生かした取り組みが求められ、その先駆者としてクラブ員は、日々農業と向き合っている。

やりがいと魅力のある農業の実現。このまちで農業を選択し、安心して結婚・子育て・生活ができる農業環境をつくりあげていくことが現在必要とされている。

## 「産業としての農業」の確立へ向けて



クラブ員も9人参加した。写真左は、原で「はつかいち苺ファーム」を経営する山本貴志さん。



「継続でき、食べていける農業を」、「販路の問題をどうするか」など、多岐にわたり情報交換した。

「観光と農業」の連携を求める声もあった。「宮島の集客力を利用し、山間部に呼び込んで」、「点在する観光農園を点で結ぶフルーツロードができれば」、などと語る場面も。

農家が直面する悩みも多くの参加者が口にした。「農業経営はたたくさんの課題を抱えている。こういう会を重ね、意見交換ができれば」と農業委員の一人は話す。

「観光と農業」の連携を求める声もあった。「宮島の集客力を利用し、山間部に呼び込んで」、「点在する観光農園を点で結ぶフルーツロードができれば」、などと語る場面も。

## 市内農業者が、農業委員会と意見交換

野菜や果物、水稻などの農業者23人と同委員や市職員合わせて48人が参加した意見交換会。平成23年度に始まり、今回で2回目。前回農業者から出された意見をきっかけに、地域の農家を訪問する現地研修を実施した。

## 農業の新たな可能性を探る

農業委員会では、農業の新たな可能性を探るため、さまざまな取り組みを行っている。

8月5日、農業委員会と市内の農業者との意見交換会が開催され、個々の問題点や課題、目指す姿などを話し合った。また、「農業担い手育成研修会」は、11月22日にさくらびあで行われ、講師に(株)オーガニックネットワーク代表石井

宏治さんを迎え開催。約200人の参加者が、田中さんの話に耳を傾けた。その後、市内の農業者である(有)とくなが園芸代表徳永和宏さんと、畑楽ファーム代表部屋伸仁さんが自ら取り組んでいる事例を発表した。

農業委員会では、こうした取り組みを進め、農業の新たな可能性を模索している。

## クラブのネットワークを生かし、納品数の確保へ

廿日市市で就農し、4年目の部屋さんが、「農業担い手育成研修会」で「新規就農者から農業経営者へ」と題した、事例を発表した。

佐伯農業者クラブ  
へや・のぶひと  
部屋 伸仁 副会長  
(35歳・浅原)

広島市出身。大学卒業後システムエンジニアや経営者を経験。その後農業を志し、平成21年度廿日市市新規就農者育成事業で、1年間の研修を受け、平成22年に就農。浅原で畑楽ファームを経営。主にイチゴと野菜に取り組む。



「畑を楽しみながら働きたい」という願いから「畑楽ファーム」という屋号にしたという。現在、65畝の農地で従業員2人を雇用している。広島市内にある「酔心」に総菜に使用する野菜を提供していることが、安定した収入を得られている大きな要素だという。マーケティングという方法で、あらかじめ品目、数量、時期、価格などを取り決めて作付けし、出荷している。

「大事なしているのは、生産者仲間との協力関係づくりです。人と人とのつながりがあるからこそ可能なこと。農業に限らず、最後は人の心なんです」と語った。

「納品数の確保が一番重要なことなんです。現在、納品数が足りないときには農業者クラブのネットワークを利用して確保しています」。

「ただし、課題は、安定した収穫量を確保するだけの技術と、安全率を見込んだ作付けが必要とのこと。」